

本号のテーマ：「県立武道館に掲げた佐久市民の誇り」

〇 はじめに

新型コロナウイルスの蔓延、感染拡大を抑えるために、本市でも国の要請に沿って去る3月2日から春休み前日まで、24小中学校一斉の臨時休業を行いました。要請があったのは2月27日夕刻のこと。あまりに突然のことでありましたが、様々な混乱は重々承知の上での国レベルの決断であることを重く受け止め、それに沿うことにいたしました。

学校も家庭も、様々な課題に直面しました。佐久市、そして佐久市教育委員会も、いかにしてこの事態を乗り越えていくか、日々目を重ね知恵を重ねて対応してまいりました。新年度につきましては、本県本市の状況から、感染防止のための配慮を可能な限り行いながら当初の計画通り学校を再開することといたしました。

ところで、本号では、この3月佐久市で産声を上げた県立武道館に佐久市が掲額した書について紹介し、新年度の出発に少しばかり明るい話題を添えたいと思います。

1 掲額の経緯

◇ 「書のまち」佐久市

「現代書道の父」比田井天来生誕の地である本市は書道文化が盛んに育まれています。天来が生まれ育った望月地域を中心に、「書のまち」、「墨の香るまち」に迫る様々な取り組みがなされてきております。中でも、比田井天来記念館（佐久市望月）が実施している「比田井天来・小琴顕彰 佐久全国臨書展」には、北は北海道、南は沖縄から、時には台湾からも応募があり、全国区の書道展として注目を浴びています。

その審査には、比田井天来の孫弟子にあたる石飛博光先生をはじめとして、会派を越えた日本を代表する書家の先生方が当たってくださっていることも大きな特徴であり、魅力のひとつとなっています。

◇ 武道館と書

武道場、武道館という場には、多く扁額や軸の書が掲げられています。これは、

武道が求めている精神性の高さと、書や書道芸術のもっている精神性の高さとがよく呼応するからであると考えています。

ある意味、武道館は、書がふさわしいというより書が必要な空間であると言えるのではないかと思います。

◇ 佐久市民の誇りを掲げて ～石飛博光氏揮毫～

その書を、「書のまち」佐久市が扁額にして掲げたいという柳田市長の熱い想いが、議会の後押しもいただく中、実現いたしました。その揮毫を、先述の佐久全国臨書展でもご指導いただいている創玄書道会会長の石飛博光氏にお願いできたのです。4つの大作が誕生しました。

こうして、「書のまち」佐久市10万市民の誇りを掲げることができましたこと、改めてご関係の皆様にご感謝申し上げます。

2 作品紹介

<1階エントランス>



「わか竹の伸びゆくごとく子どもらよ

真（眞）すぐにのばせ身を魂（たましひ）を」

※（ ）は短歌原文の表記

歌人若山牧水の大正12年ごろの作で、「やよ少年たちよ」九首の冒頭の短歌です。牧水は、大正14年、岸野尋常小学校（現佐久市立岸野小学校）に招かれて講演を行った折、岸野の子どもたちのためにとこの短歌を揮毫されました。同校では、その

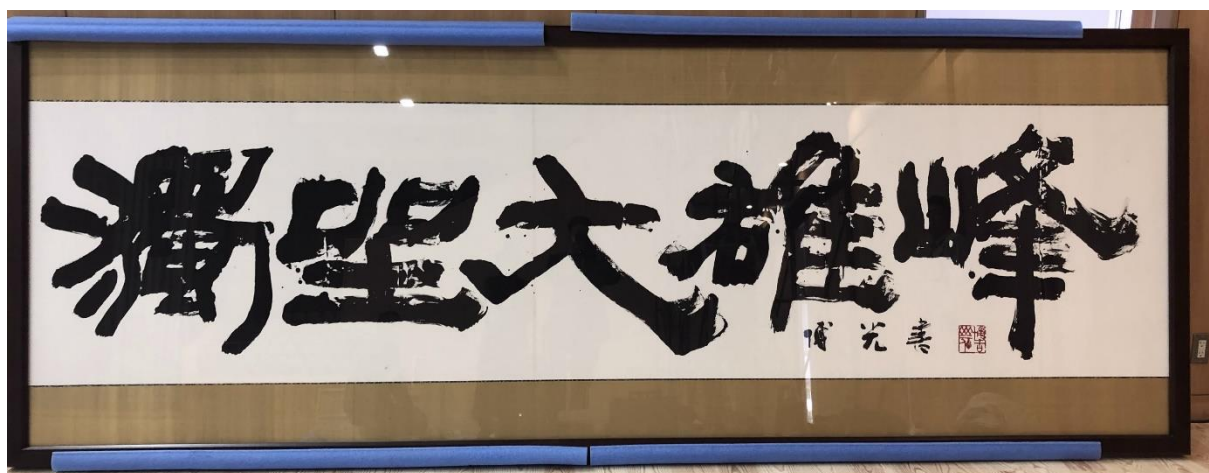
後これに曲をつけて校歌とし（昭和 38 年制定）、今日も大事に歌い継いでいます。

この短歌に込められた願いは、「わか竹教育」として教育のめざすところとなり、学校にも地域にも確かな根を張っています。

武道を通して心身を錬磨する子どもたちへの大応援歌となることを確信するものです。

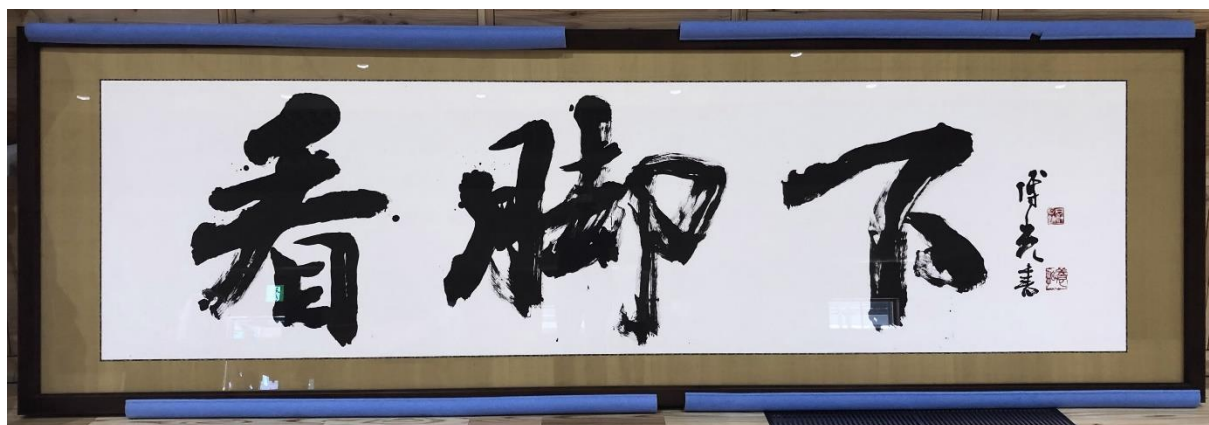
以下、解説は略しますが、字句選定に関わるこだわりを一部添えました。

<主 道 場>



「独 座 大 雄 峰」（武道館北に浅間山の雄姿が望めます）

<剣 道 場>



「看 脚 下」

<柔道場>



「登 龍 門」(「鯉が龍になる」・・・佐久鯉が跳ね上がりそうです)